

月の花挽歌 ～1.予期せぬ出来事～

1-2

ロビーに足を踏み入れた辰巳は、椅子から立ち上がって足早に近づいてくる女に、一瞬怯んだけれど、「今晚は、お待ちしております」と挨拶されて、「?…、オッ、貴女か！

てっきり着物だと思っていたから」と辰巳は目を見張りながら言って、微苦笑した。

「プライベートでお会いするのは、初めてですもの」

スタンダードなブラックドレスに、瑠璃色のベルベット地のボレロ風ジャケットを羽織った女は、打ち解けた物腰で言った。

男は女の胸まで届く髪型も含めて、見事な変身ぶりを、数年前、純米大吟醸・中汲み生原酒の試飲で、想定外のきめ細かく奥深い味わいに、思わず杜氏にハグしてしまった瞬間を重ねて、不思議な高揚感に包まれていた。

「荷物を部屋においてくるので、すまないが、この階にあるバーで、食前酒でもやってくれないか」

辰巳は妙な感慨を覚えながらも、そう言って、手でバーの方を指してから、女の同意を得るとフロントに向かった。

ヴェルサーチを嫌味なく着こなした女、白井真紀は銀座四丁目で『こはる』というクラブのママをしている。

二十年前、慶応義塾大学文学部英米文学専攻に在籍中、赤坂のクラブでアルバイトをしたのが転機だった。

美形ではないが、切れ長の目に知的な陰影を漂わせる容貌と生来の外向性に加え、卓越した会話力が小難しい顧客の評判を呼んだ。

辰巳は東京支社に出張すると、数日は滞在して、営業を兼ねた人脈づくりや、活きた情報収集などをして過ごした。

取引先デパートの商品統轄部長に連れられてきたのが縁で、それ以来『こはる』を最真にしてきた。

ホテルオークラは五階がメインロビーになっていて、メインバーのオーキッドバーが同じフロアにある。

丁重に笑顔で迎え入れたバーマネージャーに、辰巳は軽く応えながら、ボックス席からカウンターへと視線を泳がせた。

「辰巳様、お待ちしております吗？」

直ぐさまマネージャーが心配りをする。

「ご婦人がひとりで来ているはずなんだが」

「あちらにいらっしゃる方では……」

「……ありがとう」

背伸びをした格好のままの辰巳は、カウンターにふたり並んで座っている外人で死角になっていた真紀を認めると、マネージャーに礼を言った。